

中国東莞体験記

森川 慎 (高21回)



お客様の会社に現地供給する為、中国華南で子会社を立ち上げる、というプロジェクトが持ち上がり、中国との係わりが始まりました。

その時に体験したり感じたりした幾つかをご紹介します。

まず場所は広東省東莞市で、香港に隣接する深圳市と省都広州市の間に在り、西は珠江に東は惠州市に接する神奈川県位の広さの市です。東莞市へのアクセスは香港空港経由、広州空港経由、上海浦東空港経由深圳空港からの3ルートがあります。

香港経由は便数も多く割安ですが、特別区の香港から中国へは再度出入国手続きを要します。香港から東莞へは、後から分ったことですが、バス、列車、ダブル No. ミニバス、フェリー等が有ります。香港に入国せず香港空港内から直行フェリーを利用すれば、中国への入国が1回で済みます。ダブル No. ミニバスは香港と広東省両方の登録 No. を持つワンボックスカーの乗合で、これを利用すると出入国は乗車したまま出来て楽です。その時の混み具合にもよりますが、いずれも3時間位見ておく必要が有ります。

時間的に有利なのは広州空港で、入国手続きは当然1回で済み、空港から東莞へは車で1時間半位です。当時最も安かったの

は上海経由深圳空港に入る便で、深圳空港から東莞は近くて便利ですが、早朝の1便だけで、上海に一度降りますので時間もかかることを承知しておく必要があります。

初めて訪問した時は、オーソドックスに香港からバスで東莞へ向いました。香港空港で荷物を受け取り出ると、いろんなバス会社の呼び込みが大勢いて、あちこちから声が掛かります。とにかく「東莞(トングアン)」というと、カウンターに連れていかれ、料金を払うとなぜか胸にワッペンを貼ってくれます。何だろうこれは、料金を払った目印か、外来者の識別か、なんて思っていました。取ってしまわないで良かった、と後で分ったしだい。荷物を積み込みバスに乗り込むとペットボトルの水1本が配給されました。香港も中国も通常の水道水は飲めませんので、飲料水は買わねばなりません。ですから水の配給は大事なサービスなのです。

バスから海沿いの景色や高層ビル群などを眺めながら深圳国境付近に来ると、バスを降りて香港出国の手続きをします。この時、乗ってきたバスを覚えておかなければなりません。いろんなバス会社の各地に向かうバスが沢山並ぶので、間違わないように注意を要します。再び同じバスに乗り深圳との国境に着くと、今度はバスを降り荷物も持って中国への入国手続きをします。香港出国に比べると人の乱雑さがひどくなり、時間も掛かります。ようやく手続きを済ませ出て来ると、先程までのバスはいません。香港 No. のバスですから中国側には来ることが出来ないのです。さてどうした

ものかと思っていると、会ったことも無い係員がやって来て、筆者を乗るべきバスまで連れて行ってくれたのです。そう、あのワッペンが役に立っていたのです。これを捨てていたら一体どうなっていたかと思うと少しぞっとしました。失くしていたら、たぶん切符を見せてああだこうだ言っても通じず、漢字の筆談でようやく乗るバスが分り、乗車する頃は既に2～3便出た後で、すっかり時間を費やしていることと思いません。

バスに乗れて安心していると、しばらく走ったあと停車しました。そこからは行き先別に車が分かるとのことで、目的地の東莞市大嶺山鎮方面には、その日は筆者一人だけだったので、普通の乗用車に乗り換えるように指示されました。

この運転手は信頼出来るのか、一体何処へ連れて行かれるのか、ほんとに安全なのかと心細い限りでした。その時ぼんやり見ていた乗用車のドアの内側に、あのワッペンと同じマークを発見したのです。ああ、普通の乗用車だけれどあのバス会社の運行に繋がっているのだ、と分り少し安心したしだいです。そうやって、やっと目的地に到着することが出来ました。

この頃は、1～2週間位の出張ベースで進出交渉を進めていました。その最中にあのSARS（ハクビシンがもたらしたとも噂されたインフルエンザ）の問題が起きました。2003年3月に香港・広東省方面に出入りしない様という通達が出て、その後中国全体に出入り禁止となり、5月末にそれが解除される迄、プロジェクトは細々と

進めるだけでした。

この時の企業の対応方法には違いがあって考えさせられました。一つは、その地域からの帰国者は、まずホテルに1週間程滞在し様子を見て、問題が無かったら帰宅し、出社するというものでした。もう一つは、その地域からは帰国するな、その地域には行くな、というものでした。優良会社は通常前者が多いのですが、或るお付き合いしている会社の人は、うちは帰ってくるなというんですよ、とぼやいておられました。筆者の勤務先も後者のタイプでしたが、皆様周辺の対応は如何でしょうか。

その後実際に中国に赴任したのは12月25日のクリスマスで、世間はジングルベル一色で賑わっている中を、家族には申し訳ない気持ちで、東莞に赴任しました。

香港のクリスマスは、以前イギリス領であったことから、飾り付けやライトアップなどのすばらしさはよく聞いていましたが、中国は共産国なので、宗教的な行事は関係ないだろうと想像していました。ところが着いてびっくり見てびっくり、お店やレストランは飾り付けをして、店員は皆サンタの帽子をかぶり、それらしき衣装を着けて華々しいクリスマス商戦を繰り広げていたのです。その賑わしさといたら日本の比ではなく、クリスマスに名を借りた商魂逞しさそのものでありました。これだけを見ると共産国というより自由経済以上の開放経済で、何でも有りの姿を見たように思いました。

その週末に招かれた歓迎会で「バナナで

はなくライチを選んでこの地に来ました」と挨拶すると、出席した地元の人達に大変喜ばれました。東莞市では珠江付近にはバナナ農園が多く、丘陵地帯には遠目に野菜のブロッコリーのように見えるライチ畑が連なっており、特産のライチは中国品評会で一番となって、中国のライチは世界一だから東莞のライチは世界一だ、と地元で自慢の種だったからのようです。実際とても美味しいのです。

食べ物の話のついでに、「食は広東に有り」と言われるだけあり、現地の人はほんとうに何でも食べます。よく四つ足は机・椅子の類を除けば、飛ぶ物は飛行機・ヘリコプターの類を除けば、何でもと言われています。私が困ったのは、ゲンゴロウを勧められた時です。バケツの中のゲンゴロウを見て、下に魚がいるのだろうと手で除けて見ましたが、下には何もいません。これはダメだと思いましたが、でもせっかく勧められているし、どうしよう。そこでとっさに「これは私が幼少の頃、近くの川や池でよく一緒に遊んだ友達です。私は友達を食べることは出来ないから、他のものにしましょう」としのぎ、何とかセーフでした。

次に、レストランの支払いでびっくりしたことがあります。数人で食事をした時のことです。席に案内され、人数に見合う注文をしました。その後係員が来て、頼んだ料理の一つが今日は品切れとのことで別料理を勧められ、それにすることにしました。するとまた係員が来て、別な注文品の材料が足りないのどうするか、ということでした。それなら、それは不要であると断り、



とにかく楽しいひと時を過ごしました。そして勘定となった時、席に伝票を持って来た係員が「670元」と言うのを聞いて、中国の友人がちょっと見せてと伝票を見てくれました。この料理はこっちに変更したし、これは量が足りないと言うのでキャンセルしたよ、とクレームをつけてくれました。請求に来た係員は戻って行き、修正した伝票を持って来て「490元」となりました。なんと180元も安くなったのです。それまでの半年間、筆者は良く分らぬまま余分に支払ったことが何回もあったのだろうか、と少し腹立たしくなりました。

でも良く考えると、これは中国特有の騙すというようなものではなく、人口が多い為の業務分担による連携がうまく行っていないことによるのだろう、と想像しています。中国のレストランでは、受付の人、席に案内する人、食器やお茶を準備する人、注文を受ける人、料理を運んでくる人、伝票を集計する人、請求に来る人が大概異なります。そういう中でその係員が騙そうと簡単に出来るものでもありません。自分主義の多い中で、きっと業務がうまく繋がっていないのだらうと思います。皆さんも中国でレストランや買い物の時、品数と値段のチェックを忘れないようご注意ください。